

比較文化Ⅱ [第3回]

丸山純 (jun@site-shara.net)

●カラーシャの暮らしの変遷

◆1960年代から外の文化（近代文明）が入り始める

1960年代は、ヒンドークシュ山脈の登山の帰りなどに立ち寄る限られた人たちだけ
70年代半ばに道路（四輪駆動車が通れる道）が南のピリウ谷に開通し、少しずつ外部の文化が入り始める

珍しい民族衣装や独特の習俗などで次第に「秘境」として知られるようになり、フランスやアメリカ、イギリスから観光客のツアーが訪れるようになる

踊りを見せてお金をもらい、写真1枚撮るのにもお金をせびるようになった
文化人類学者や民族音楽学者がきて、高額な謝礼を払う

「俺たちのことを書いてお金や名誉を得るのだから、金を払うのが当たり前だ」

このひとことにこだわり、これまで「プロ」としてカラーシャに関わらなかった
クリスチャンのミッションが、優秀な少年を町に連れて行って教育を受けさせることも

◆最初の滞在（1978）の頃はほとんど自給自足の暮らしだった

1977年に山越えルートでムンムレット谷にジープが行けるようになる（冬季は閉鎖）

ムンムレット谷にツアー客や貧乏旅行者が行くようになった

78年当時はマッチさえも貴重だったし、みんなからタバコをよくねだられた

炉端で小さな火を燃やして明かりにするため、煤で家の中も人の顔も真っ黒

当時最高だった100ルピー札がなかなか受け取ってもらえない（現在は5000が最高）

事前に都市部で両替して、1・5・10ルピーの分厚い札束を持ち歩く必要があった

◆1980年代から次第に貨幣経済に巻き込まれた

ソ連のアフガニスタン侵攻（1979～89）で、アフガン難民がチトラルに流入

食料が不足し、自給する分として作っていた作物が高く売れた → 換金作物

薪ストーブが入り、煤に悩まされなくなったが、その代わりに石油ランプが必要に

石油を買うのにお金がある → ますます貨幣経済が浸透

●援助が文化を変えていく

◆1980年代後半から、さまざまな援助が入り始める

中央政府・州政府の援助はうまくいかなかった

まず行政が援助金の大半をピンハネし、さらに少なくなった予算を地元の有力者である「請負人（ティカダール）」が受け取って私腹を肥やす

いつまで絶っても完成しない水路や道路。提供された援助金が消えていく

観光客目当てに、近隣のイスラーム教徒のホテルが次々と建てられた

教育を受けた若者たちも農業や牧畜を毛嫌いして、ホテル経営に乗り出す

素顔をさらす女を拝みに、パキスタン人の若者たちが押し寄せ、トラブルが頻発
外部に働きに出た出稼ぎ者を中心に、イスラーム教への改宗も相次ぐ

◆80年代半ばから、国会議員選挙の買収合戦が始まる

パキスタンの国会（下院）に用意されたマイノリティのための1議席

カラチに拠点があるゾロアスター教徒の候補者による買収合戦

ビール工場主 vs ホテル王の選挙戦で、親兄弟が派閥に分かれ、憎み合う

◆NGOによる援助の開始

1980年代前半にクリスチャンのミッションが、ある村だけに電気を引く

1980年代後半から、イスマイリ派のアガ・ハーン財団の援助がチトラルに入り始める

90年頃にダイアナ妃がチトラルを訪問し、イギリスの巨額な援助が入る

1990年代半ばに、カラーシャ谷に住み着いた日本人のわだ晶子さんが、日本大使館の援助を得て、自分の住むルクムー谷と南のピリウ谷に電気を引く

丸山のフィールドであるムンムレット谷は、ようやく90年代末に電気が引かれる

◆価値観の変化が始まる

「お金は稼ぐものではなく、分配するもの」という観念が広まる

パキスタンの共通語である、ウルドゥー語のできない老人たちの力が弱くなる

街に出て外の世界で教育を受けた、ウルドゥー語のできる若者たちが力を持つ

共同体の人間関係をとりまとめる旧来の政治力よりも、政府の役人と交渉する＝金を取る能力が重要

みんなの話題は、お金の分配のことばかりになり、氏族・家族・兄弟がばらばらに

●巨額の資金が流入したギリシャの援助

◆90年代半ばからギリシャのNGOの援助が入り始める

カラーシャは、アレキサンダー遠征軍（B.C.327年）の末裔であるという伝承をもつ登山に来た高校の教師が、自分たちの「片割れ」を“発見”してNGOを立ち上げる青年や子供たちをギリシャに連れて行ってテレビに出演させ、募金を展開
カラーシャはギリシャ人の子孫であると、歴史を改変
少しずつ援助の輪を広げて、ほかの学校にトイレや水飲み場を作る
鉄筋3階建ての巨大な「博物館」（寄宿舎や診療所も併設）も完成（2005）

◆里親制度（フォスターペアレント）を募り、奨学金を出す

一人の子供に、公務員の給料より高いお金を出した
生まれたばかりの赤ん坊にまで奨学金が出る
奨学金として溜めておらずに親が使ってしまう、新しい家がどんどん建ってしまった
管理がずさんで、実際の使われ方をよくチェックしなかった（その後、是正された）

◆莫大な資金が投下されていることが、チトラル中の話題に

「なぜカラーシャだけが優遇されるか」と周囲のイスラーム教徒たちの嫉妬を生んでいる
バザール（市場）に行っても、みんなが援助の金額を噂にしているほど
2009年9月、中心人物がアフガニスタン側の武装勢力に拉致され（身代金200万ドルと過激派指導者の解放を要求）、ようやく2010年4月に解放された
現在、アフガン側の過激派がチトラルに流入しているため、外国人の立ち入りは制限され、護衛の警官付きでわずかな日数認められる状態

◆カラーシャ社会での援助活動は難しい

あまりにも援助が当たり前になり、カラーシャに直接的に利益をもたらさない者には、批判の声が寄せられるようになってしまった
莫大な資金が投入されてきたため、草の根のささやかな援助は馬鹿にされる
若い世代に権利意識が強く目覚め、マイノリティであることの示威行動が目立つ
周囲のイスラーム教徒からは大きな反感を買っている
若い女性が民族衣装のままバザールを歩き、ジープを乗り回す

村でも電波が届く時代になり、ケータイを持っている若者も増えてきている

女であることを武器に、州政府高官や大富豪と親密な関係になり、巨大な家を建てたり、援助の金をせしめたりする女性も出てきた

人間関係が複雑に絡み合う

誰かの利益が、誰かの不利益になり、全員の期待を満たすことはできない

わだ晶子さんのように、地元で腰を落ち着けなければ、とうてい援助活動などできない

●草の根援助の実践——カラーシャからチトラルへ

◆Mihoko's Fundの誕生

「美穂子基金」（西山美穂子寄付金）の話が持ち込まれる

故・西山三千樹氏（財団法人日本・パキスタン協会元専務理事）の夫人

かつてパキスタンに17年間滞在

パキスタンの子供と女性のために、使って欲しい

日本・パキスタン協会のプロジェクトとなる

◆Mihoko's Fundの経緯

▼1999年秋

チトラルの王族のジャマール夫人が、私立の小学校をつくる

チトラル南部のドロシュ地区シャイニガール村

女性の教師を養成するための学校「Community School Shainigar」

情操教育のないパキスタンでも、ぜひ音楽の授業をやりたい

楽器や教材、文房具を持っていき、音楽の授業を実践

▼2001年秋

校庭に、プレイグラウンド（フィールドアスレチック）を造りたい

「造ってくれるのではなく、自分たちに造り方を教えて欲しい」

日本人建築家2人に同行してもらい、地元の大工・職人を指導して遊具を7つ製作

9.11同時多発テロでやむなく、途中帰国

▼2002年秋

遊具の補修と、前年やり残したことをやる

人気のない遊具を撤去し、新しい「危険な」遊具に

日本の紙芝居を持参して上演、母親参観日に劇の上演も

カラージャの村でも、紙芝居上演を実施

長老による早朝の物語の授業を支援

ペシャワール近郊の部族地域の女子校にも、遊具ができる（→次週）

パシュトゥン人のアスマット・ウラー氏の資金

▼2004年秋

ドロージュとルクムー谷で「お絵描きワークショップ」を実践

パキスタン人女性画家にイスラマバードから同行してもらう

ノーベル平和賞候補にもなったフォージア（Fauzia Minallah）さん

ドロージュとムンムレット谷で「デジタルカメラ教室」を実践

キヤノンマーケティングジャパンの支援でカメラとプリンターを借りていく

男子禁制の「女性のための店」取材

外に出られないイスラームの女性対象の雑貨屋

アスマット・ウラー氏の資金で、部族地域にさらにもう一つプレイグラウンドを造る

▼2005年末

Community School Shainigar閉校

欧米の援助で、欧米風（キリスト教的）教育をしていると、噂が蔓延

卒業生を他の中学校・高校が受け入れてくれない

カシミールの地震（2005.10）で、援助のお金がこちらにこなくなってしまった

手のひらを返すように、優秀な生徒を欲しがり、転校が可能になった

◆いまになって思うこと

ジャマール校長と個人的に親しく、その意向に沿いすぎて、現地の事情など、冷静な判断ができなかった

こちらのスタッフが女性主体で、女性目線で進めたため、地域の保守的な男の動きに注意が行かなかった